

西郷隆盛一代話

弘賣堂壽梓

山崎年信画

篠田久治郎編輯

彙



A442
2.

西郷隆盛一代話第二号

東京

藤田仙果編

再び説洛東清水寺の別當所あり住持月照を
 信海○西々言○脚○海江田武治○平
 郎○安積五郎ら經書の講義と披瀝あり日と夜
 く舎合一梵刹也へ奠るの肉を禁す清水甚喜相
 尊糖一ん料理は酒毒をひらき互ひ二代は
 酒氣ゆめぐりて瓶のみ哉ゆ赤き初王を二
 皇帝の威光を耀やうきんと或ひは怒
 り評義まらしくあり一処へ業を味方よ加り

西郷隆盛

西郷吉之助



西郷吉之助



西郷吉之助

海老原
伊豆
三千香
笠亭仙果

月照師
西々吉の助



西々吉
頼一
川下ら

謡へるあり振常よ後らす果の梅ととり出さるる
しと海よりいん大嶽のやどるひかられぬ程もあらせ
捕手の人教士足の怪水寺へ詣らみるよと
如賀不守守まこ下辺のみとてさく
冷時を厨の唐紙を明西々吉と捕吏らよ
りも併ひ司梅籍なる奴等なる勅所
乃りも無込入しん絨不等しとる者なり
月照師は注用して他中より御守を
足活の遺士面白吉之助なり
弟法を為さば用捨れせと不吉不味り

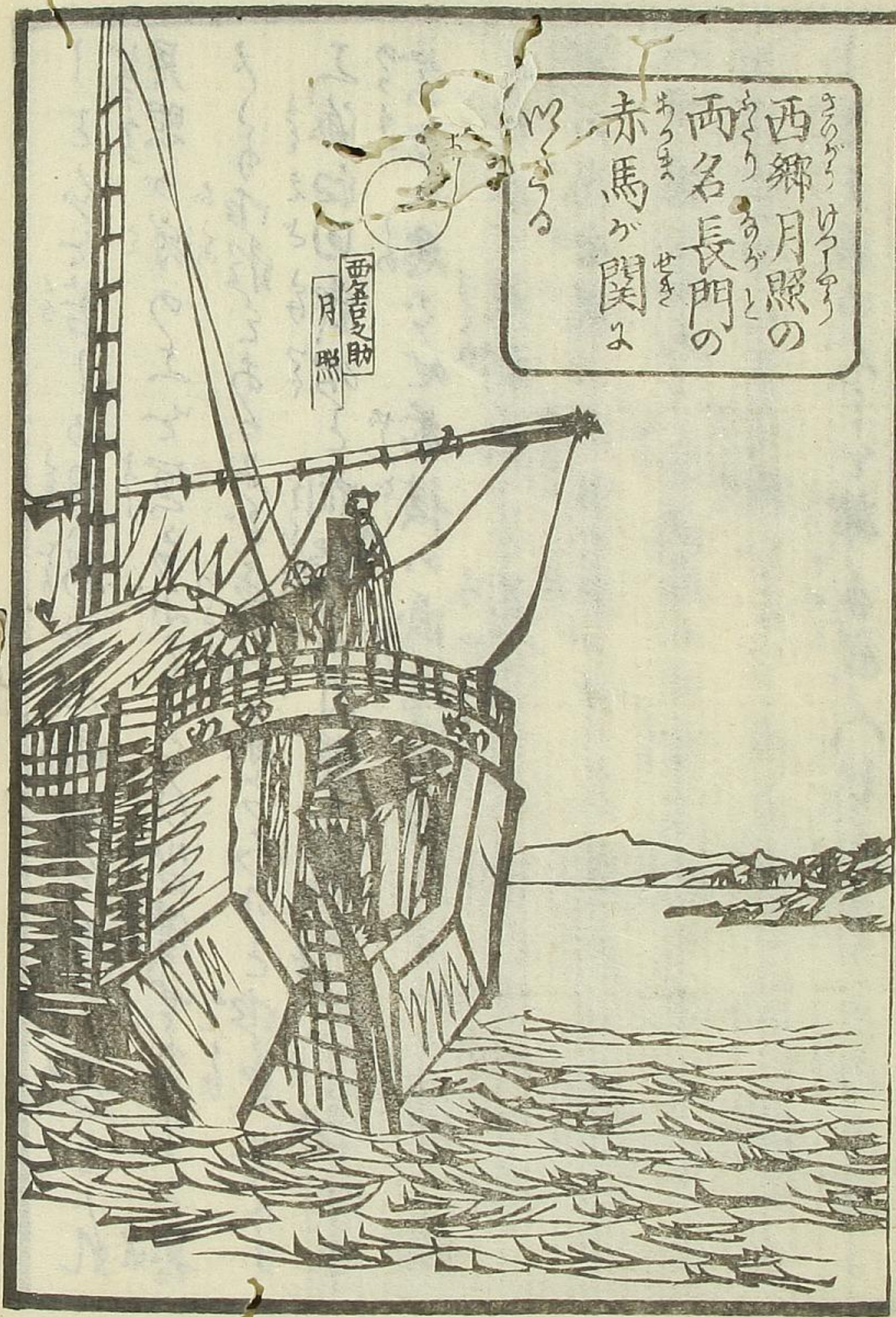
左より折るの孔さごとく一薩藩の名よおしと又ん
 威るや懼れけん既而ゆく者前よきとふ今日我々未
 りしん此法よよつて月照と召連よ向ふとる但
 一不在とこれ有るゆつては所よと待らけん故と
 極み人ぎれがその猶よ致されよと為る其よ
 入り是極とまを給くは成就院と名を去よまると知
 つても人隠れよ附来と捕人を瓦目よりけ着のり時チ
 ウと名のニタ名乃を召早目も再よ入相とる
 束とる隠れ盡く立ちどり一が旅お着来一近傳西殿
 へ代とせりは近傳西殿へ何とぞ一と月照と見けと

一とんを苦しめぬおゆえ西を近く召され
 月照が身の上を直さふとらひ保護せよとと異
 くの由をあるあぞ要細兼と人ゆと由文とて
 工海に回武次と相證し月照よ女小社と着せ女
 宗と一思むせ前後の武次とあ人より中護一
 月照に候別れとる花洛をを迎れゆ依水へそり
 候ふ出無異よ大坂へ着せ一か薩州の藏屋敷
 へ月照をぬく一西面を四方よ包て世の風説
 と探索あとも月照をとらめと為て八方へ離散せ
 一号王家の人とを捕り役人けん重よ召取候と

西の書二冊

四

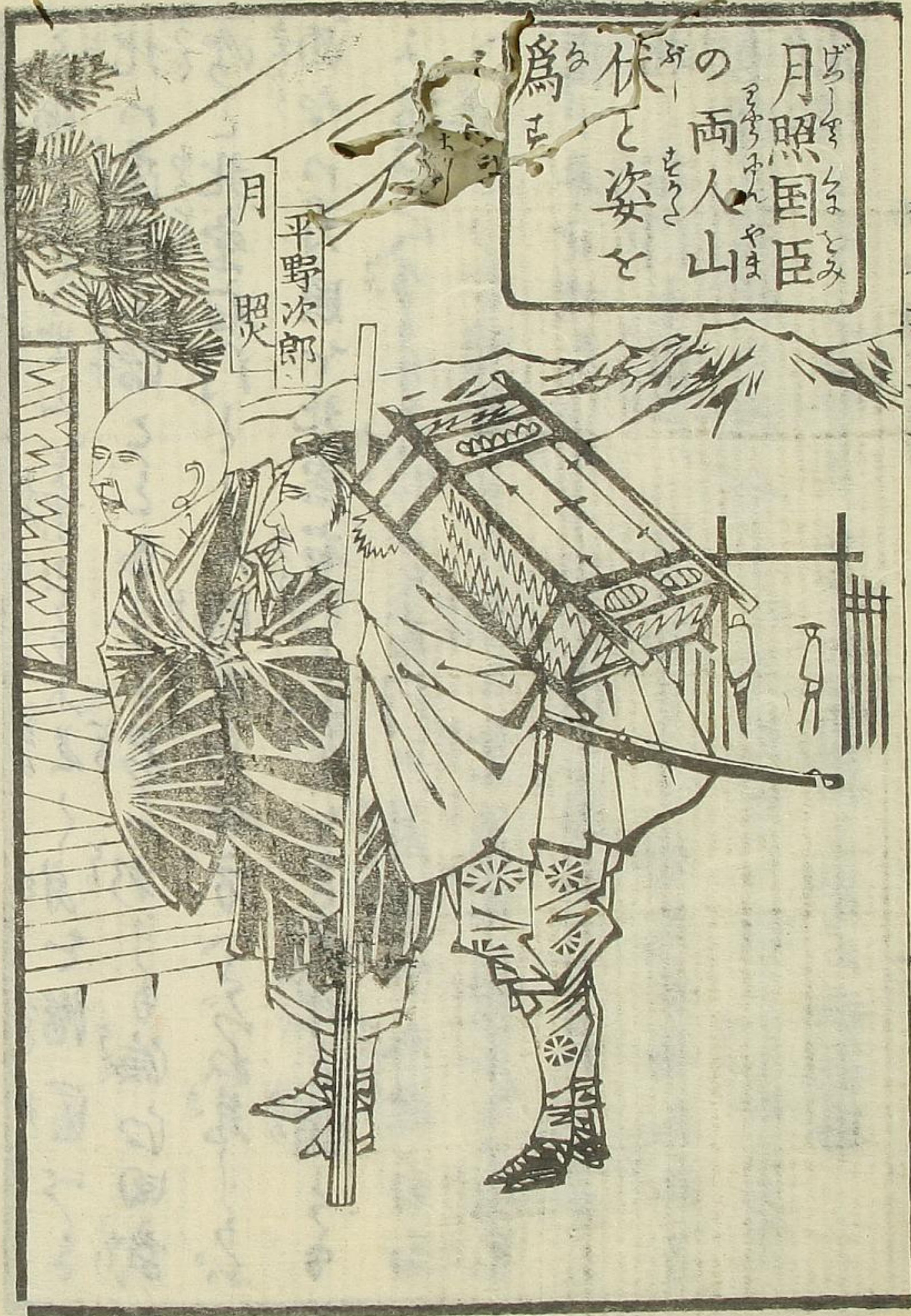
西郷月照の
 兩名長門の
 赤馬が関よ



よゝあれが百一の中有てふ近藩殿の口思めしを勇
 餘とますのみあらはれ我身の恥辱との上あり僥倖
 今宵九別海へ出帆ます船あれがト先長門へ
 船のつとと月照も中委細をまあしそ夜中ふの
 別藩のつとと小船にあらんうらまありつ船の草を
 船をあらどり水門より最ひそ中より忍びびり
 安治川を艘くぐるよ大阪奉行の目附船細郷が
 船のそまきて海を押切行さま乱亂の奴と見ん
 くれがまある小船暫らくまてと声をそ船を早め
 まてよけ方へ乗後らんとす船のあをも言ひ



月照国臣



月照国臣
の
山人
の
休と姿を
爲す

平野次郎
月照

山人の休と姿を爲す

平建治郎國貞の月照と争ひて落しつゝ中にて舟船を
 雇ひ肥後の沖より大隅の地方と廻り薩長に及
 藩船や一が地國中他處の人の通行をも最重
 れが悉く工支を巡らして西人とも懸巾後うけ
 今一候とて未だ三宅院流の山依と安を發せ
 各の實所よりうり秋ととも京都より三宅院より
 此用の養あつて大隅の日向の存託院まで系
 る使信ありとりふよ言所後人あ人が詞と夜後
 の不於合を怪しみ終ら捕んと仕交せり
 西郷隆盛一代話第二号 畢

御届明治十年十一月五日

編輯人

篠田久治郎



出版人

上村清左衛門



第五大區三小區
 下谷徒町三丁目半
 第五大區五小區
 淺草並木町番地 價三圓

筆工 本所亀澤町壹丁目 早川幸次
 佛国大匠ト元氏傳采

官許 晴光水 一瓶 六錢
 めぐさとり

本家 東京伊勢町三番地内藤久八製
 取次所 篠田仙果

鹿兒嶋大激戰記

初編 尹拾三編

幼童面良紙 初号より
 筆出板
 是の面良紙物中は本を最重
 面白き双葉あり

